

総合人間科学 倫 理 学

1 構 成 員

	平成 28 年 3 月 31 日現在	
教授	1 人	
病院教授	0 人	
准教授	0 人	
病院准教授	0 人	
講師（うち病院籍）	0 人	(0 人)
病院講師	0 人	
助教（うち病院籍）	0 人	(0 人)
診療助教	0 人	
特任教員（特任教授、特任准教授、特任助教を含む）	0 人	
医員	0 人	
研修医	0 人	
特任研究員	0 人	
大学院学生（うち他講座から）	1 人	(0 人)
研究生	1 人	
外国人客員研究員	0 人	
技術職員（教務職員を含む）	0 人	
その他（技術補佐員等）	0 人	
合計	3 人	

2 教員の異動状況

森下直貴 教授 2002 年 11 月～現職

3 研究業績

数字は小数 2 位まで。

	平成 27 年度	
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	2 編	(1 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(2) 論文形式のプロシーディングズ及びレター	0 編	
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	
(4) 著書数（うち邦文のもの）	1 編	(1 編)
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0 編	(0 編)
そのインパクトファクターの合計	0.00	

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森下直貴：＜老成学＞の構想—老人世代の「社会的再関与」によるコミュニティ再生への展望
浜松医科大学紀要（一般教育）第30号：1-43、2016.3.
2. Naoki Morishita：A View of Risk from the Perspective of Ethics. *Formosan Journal of Medical Humanities*, 15&16:65-84, 2015.9.

(4) 著 書

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. 森下直貴 編著：『生命と科学技術の倫理学—デジタル時代の身体・脳・心・社会』
丸善出版、262 ページ、2016 年 1 月

5 医学研究費取得状況

(万円未満四捨五入)

	平成 27 年度	
(1) 科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）	1 件	(370 万円)
(2) 厚生労働科学研究費	0 件	(0 万円)
(3) 日本医療研究開発機構(AMED)による研究助成	0 件	(0 万円)
(4) 科学技術振興機構(JST) による研究助成	0 件	(0 万円)
(5) 他政府機関による研究助成	0 件	(0 万円)
(6) 財団助成金	0 件	(0 万円)
(7) 受託研究または共同研究	0 件	(0 万円)
(8) 奨学寄附金	0 件	(0 万円)

(1) 科学研究費助成事業（文部科学省、日本学術振興会）

1. 基盤研究（B）特設分野 ネオ・ジェロントロジー：15KT0005、「老成学」の基盤構築—＜媒介的共助＞による持続可能社会をめざして、研究代表者：森下直貴（浜松医科大学教授）、平成27年度～平成30年度：1,360万円（直接経費）、平成27年度：370万円（同右）

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	1 件	3 件
(2) シンポジウム発表数	1 件	0 件
(3) 学会座長回数	0 件	0 件
(4) 学会開催回数	1 件	0 件
(5) 学会役員等回数	0 件	3 件
(6) 一般演題発表数	1 件	

(1) 国際学会等開催・参加

- 1) 国際学会・会議等の開催

1. 老成学・学術シンポジウム（主催）、北京社会科学院哲学研究所、2016年3月23日。

3) 国際学会・会議等でのシンポジウム発表

1. 老成学の構想、高齢社会問題シンポジウム、釧路国際生命倫理セミナー、2015年8月29日。

5) 一般発表（口頭発表）

1. Naoki Morishita: On the digital medicalization, International Society of Clinical Bioethics, Bol, Croatia, Sep. 21, 2015.

(2) 国内学会の開催・参加

2) 学会における特別講演・招待講演

1. 森下直貴：＜老成学＞の構想、フィールド医学研究会、京都大学東南アジア研究所、2015年12月16日。

2. 森下直貴：＜老成学＞の構想、名古屋哲学研究会、名古屋市立大学、2015年12月19日。

3. 森下直貴：＜老成学＞の構想、高齢者問題シンポジウム、岡山生命倫理研究会、2016年2月20日

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

1. 日本生命倫理学会 評議委員、編集委員

2. 中部生命倫理研究会 会長

3. 日本哲学会 理事

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. 基盤研究（B）「老成学」の基盤構築--＜媒介的共助＞による持続可能社会をめざして：

本研究のねらいは「老人世代の生き方」をあらためて問い直すこと（これが老成の視点である）を通じて、老人世代による社会的関与のあり方を新たに捉え返し（つまり新たな老人観を提起し）つつ、多様な社会的関与を接続することによってコミュニティの再生をめざし、最終的には世代間の持続可能な未来社会（これが老成社会である）を実現することにある。

研究の初年度にあたる今年度後半（9月開始～翌年3月）には、当初に構想した研究計画を練り直し、これをいっそう具体化してきた。そのために例えば、メンバーそれぞれが、種々の研究会に参加・講演して意見を発表し、また国内外の施設や取り組み（例えば、福島の子おこし、タイ王国の健康推進プロジェクト、静岡県認知症カフェ、北京のナーシングホーム）を視察し、さらに国際研究集会（老成学学術シンポジウム、中国社会科学院哲学研究所）を開催して比較する視点を養った。

3月の全体会議では、以上の経験をもち寄る中で、異なる研究グループの視点や異なる見解をも考慮しながら、研究会の基本方針を確認し合った。すなわち、老人世代自身だけでなく、中年・青年世代をも含めた全世代が、「老い」の意味（とくに働き方・性・死）を不断に問い直しつつ、現代社会において深刻化する諸問題（とくにセーフティネットの弱体化）に対して、多世代間の協力・補完を通じてと同時に多領域の広がりの中で、取り組むことを支援するための研究という位置づけ

である。会議ではまた、次年度に向けて、研究メンバーの関心やこれまでの研究実績をふまえ、それぞれの役割を明確にした。

14 研究の独創性, 国際性, 継続性, 応用性

1. 超高齢社会に突入している現在、それにともなう種々の変容と、そこに起因する様々な「倫理問題」に対して予見的・先行的にアプローチすることは、日本社会にとってだけでなく、諸外国にとってもグローバルな文明論的課題となっている。とはいえ、この課題に対する哲学・倫理学分野からのアプローチはこれまでほとんどなく、あったとしても個人的な思想との表明か、思想史的な比較研究くらいに止まっていた。他方、既存の種々のアプローチは夥しくあるとはいえ、狭い視野を超えられないでいる。こうした学問状況の中で、私たちの研究グループは自覚的に哲学・倫理的なアプローチをとり、文明論的な視野において課題に取り組んでいる。ここで採用される＜老成＞という視点は、「老人世代の生き方」を不断に意味づけ直すことである。そしてこの視点から、全世代がこの意味づけに参加することによって、新たな老人像を提起し、働き方・性・死の意味を具体的に掘り下げながら、社会的関与の多様な実践例を発見し、あるいは新たに創出することを通じて、弱体化したコミュニティの再生をめざしている。ここに構築される新たな＜老成学＞は、例えば中国の研究者に対しても学問的な刺激となっている。